

クラパレードの「行為の大法則」について

太田祐周

一九〇〇年、スエーデンのエレン・ケイが、まさにはじまろうとしていた二十世紀に向って、「児童の世紀」たることを要求する著作をあらわし、「すべてを児童から」の

「活動学校 l'Ecole active」運動を展開したのであるが、この教育運動にその最も科学的な基礎づけを与えることになったのが、クラパレードであったのである。

モットーのもとに、ルソーの消極教育論を展開したことは、あまりにも有名である。おくれること十二年、ルソーの生地ジュネーヴにおいて「教育科学学校」を創設して、これに「ルソー研究所」の名を与え、その銘として、「教師は生徒から学ぶ」という文字をえらんだ心理学者、エドゥアール・クラパレードの、二十世紀初頭における新教育運動に対する貢献には、見すごしえないものがある。イタリーでモンテッソリ、ベルギーでドゥクロリの活動が伝えられるころ、ジュネーヴではフェリエールが「子供の家 La Maison des Petits」を創設して、注目すべき

彼の弟子ジャン・ピアジェの名があまりにも高いのにくらべると、その名はそれほど知られていないが、彼の仕事は、教育学に対する心理学の位置ないし影響という、教育学にとって大きな問題に、ある重要な示唆を与えるように思われる。

さてクラパレードの心理学は、何よりも先ず機能主義的心理学として規定される。この心理学は、精神過程をそれだけ孤立的にとり出し、その構造を分析的に究明するのではない。精神過程が、有機的存在としての人間の生活の中に緊密に組みこまれていることを強調して、その生物学的

意味を考察し、その人間生活の全体に対する役割をあかそうとするのである。^①

この心理学は、人間存在の有機性を強調する点で、「生物学的」であるとともに、その機能主義的立場から人間生活の全体性を問題とする点で、教育の根本にかかわる。しかも、被教育者の内的発達そのものに教育の重心を移させる理論を、有機性の根源にまで溯って強化する点で、教育の根本的改造にかかわるのである。^② かような視点は、ロックやルソーにまで溯ることができるのであるが、そのいわば哲学的見解を、したがってまたその影響を受けたえる新教育運動の実践を、科学的に裏づける位置に、この機能主義心理学は立つのである。^③

クラパレードは『教育の機能的概念』にいう、「子供を、教育計画や教育方法の中心とみなし、またある欲望によって決定されたある行動へと、心的過程を徐々に適応させて行くことを、教育そのものとみなす」と。典型的な児童中心主義的発想であるといわれるであろうが、その際気付かれるクラパレード理論の特徴は、「欲求 besoin」を、行動の源泉として、特に強調した点に求められる。

教育が、「生徒の注意や興味をひきおこすことから始めなければならない」というのは、すでに「陳腐な」ありふ

れた主張であろう。問題は、「どうして首尾よくそれをなしうるか」にある、とクラパレードはいう。「教育学概論をいくつも渉獵するならば、子供に供される教材を興味あるものにするしかたについて、疑いもなく、よき忠告がいくつも与えられていることが分る。けれどもそれらは、十分深いところには行っていない。全精神活動の眞の源泉、もしその精神活動の力動的な力を開発したいのであるならば、まずもって噴出させねばならない源泉は、何であるかを、探究しているようにはみえないのである」^④。こう指摘したうえで、旧来の能力心理学を拒け、これに代えるに、「ずっと実りがある」と自讃する機能主義心理学をあげて、クラパレードは主張する。

「この心理学にとっては、記憶・理性・想像力等々は、もはやいづれもそれぞれ一個の全体ではなく、現時点の必要に答えることを役割とする活動の、手段である。それらの活動手段を刺戟するには、それらを生じさせ、それらの存在理由であるところの欲求を、刺戟するだけで十分である」^⑤と。

かように活動の原動力として「欲求」を重視することは、行動の内発性を強調することを意味するであろう。欲求なき行動は、外的動因に左右されるものとして、その活

動としての性格が低いと見做されるのである。かような欲求概念は、クラパレードを、俗流幸福論からも、俗流唯物論からも、遠ざけるであろう。

しかしこの独自の内発主義は、単なる主意主義を語るものではない。たしかに知的諸機能は、活動の手段とされる。しかし知的諸機能は、活動を、その諸条件との関係において把え、そのことよって、活動をより効果的に促進する。そしてその作用そのものにおいて、活動そのもの・活動のプロセスをより知的にし、少くとも活動を指導するのである。この点では、クラパレードは、むしろ主知主義的傾向を示して、フランス的思考の伝統をうけつぐかに見える。認識の発生的研究に大きな貢献をしたピアジェが、この傾向を完成するものと思われる。

しかし誤解があつてはならない。主知主義的であるとは、他の機能主義との比較から際立ったクラパレード理論の特性である。この理論は、ジェイムズやデュエイのそれに劣らず深く根付いた機能主義を表現するのであって、その視点が子供に向けられたとき、「何よりも先ず遊ぶために作られた存在」、その生活が遊びである存在を、発見する。そして遊びの「自然な原動力」、子供がその存在の底深くかくしている自然なエネルギー源、「その泉をふき出

させるすべを非常によく知っている自然を、まねよう!」、とよびかけるとき、クラパレードは、自然に、彼の同郷の先人ルソーを思い出させるのである。ルソーの児童論について、科学者としておそらく最も同情にあふれる研究を発表したクラパレードは、人間生活の全体的統合の意義を展開するその所論の中に、おのづから、主情主義的傾向を包摂するということもできるかもしれない。

右の指摘は、活動における欲求の起動的意味の強調も含めて、クラパレードの理論が、人間行動を均衡のとれた全体において把えようとするものであることを、示そうとするものであって、このことを如実に示すのが、『行為に関する大法則 *Les grandes lois de la conduite*』の提案である、と思われる。

本論は、クラパレードのこの行為理論を特にとりあげて、その大体を概観したい。この理論の中心ないし出発点となるのが、すでに指摘した「欲求」に関する法則であるが、それについては別にかなりくわしく取りあげる機会があったので、本論ではむしろ主として、そこからの発展に紙幅を割き、クラパレードの、広く実践を展望しようとする視野の広さに注目したいと思う。

一

心理学を、精神活動と行為の科学と見るクラパレードは、「子供の本性の味方となろうと心がける教育者に役立つ」ことを願って、行為に十個の法則を見出し、その第一に「欲求の法則」をおいた。生とは、彼によれば、有機体において、たえず破壊されては回復される均衡のプロセスを意味するが、その均衡の破壊、したがって均衡回復の動きそのものが、欲求とよばれる。行動は、つねに刺戟の反応としてのみあらわれるわけではない。刺戟自体を、生体に対して意味づける欲求によってこそ、あらゆる行動はひきおこされるのである。

しかし欲求の法則は、根本的には「生物学的法則」であって、「正確には心理学的法則ではない」といふべきであろう。なぜなら、欲求の多くは、心的活動の介在なしに満たされるからである。呼吸、消化、体温調節、分泌作用等、生存に直接必要な均衡維持機構にかかわる欲求は、自動的に行われる。

だがかような特定の身体器官の自然的作動によっては満たされない欲求、「有機体がその全体をもってする運動、すなわち行為 *conduite*」を必要とする欲求が、ある。食

物を探しまわらねばならなかったり、空気が思うように吸えなかったりする場合、活動はすでに自動的ではありえない。精神活動が生ずるのはこのときであり、クラパレードは、そこに「精神生活拡張の法則 *loi de l'extension de la vie mentale*」を指摘する。心的生活は、「欲求とそれを見たす方法との間にある距り」に比例して、拡張られるのである。と。有機体の自然的適応の失敗が、意識発生条件であり、欲求充足の困難度が、精神生活を決定するのである。

この法則の「系」として、第三に「自覚の法則 *loi de prise de conscience*」が示される。すなわち「ある過程・ある関係・ある対象」に対して「自動的・無意識的に」働きかけることが、「早ければ早いほど、また長ければ長いほど」、それらのものを意識することが、おそくなる、というのである。

例えば六、七歳以下の子供に、「蜂と蠅とで、どこが似ていて、どこがちがうか」と尋ねると、「ちがいはいくつもとやすく数え立てるのに、似たところを示すにはとても苦勞する」のが認められた。この事實は、人を驚かせて、一見甚だ逆説的だと思わせるだろう。なぜなら子供は、とてもちがうものをも同一視するからである。ピアジェの注

解にある例でいえば、幼児にとつて、大人はすべてパパであり、カナリヤばかりみていると鳥はみな黄色になり、都市はジュネーヴのようにどれも湖畔にあることになる。

「似ているところを利用して、一般化」ということはないから、「子供の思考の第一段階のすべてに固有な特長の一つは、まさしく極端な一般化」である、というべきであろう。しかるにこの幼少期の一般化作用は、「新しい色々なものに、同じ態度を」、「何の抑制もなく」、「たえず自動的に転移させる」ばかりで、「何の意識的活動も」伴わない。「しかしやがてこの自動作用は、いくつかの障害にぶつかる」。「主体は衝撃を感じ、目的に達しない。そのとき彼は諸事物のちがいを意識する。彼が諸事物の類似性を意識するのは、ずっとあとになってからのこと、同じように扱わねばならないものを、ちがった風に扱っている時になってからである」。

また、ピアジェの所見として、クラパレードが取り上げている例であるが、子供は、とてもよく知っている言葉を定義できない。彼は実行する。その言葉の定義を、意識する前に、実際の行動に移すのである。実際、大人の場合でも、ふだん道を歩いているとき、自分の歩みのことも、その道のことも考えはしない。例えばガス管工事に出会って

はじめて、道について、自分の足のおきばについて、意識するのである。

さて右のような事例による証明を評して、「小さな一事実から、意識の機能という全般的問題にまで、自己を高めたやり口ほど、クラパレードの理論的巧みさを示すものは、またとない」と語ったピアジェは、クラパレードの理論的功績のほどを、次のように要約している。「発生の順序では最初のものは、分析の順序では最後のものであるという、アリストテレスの深い指摘があったのに、心理学は、クラパレードまで、活動そのものに対する自覚の様々な関係を、正確に公式化しようと努めたことはなかったのである」と。

この自覚(意識化)の法則の逆が、「無自覚化(無意識化)の法則 *loi de perte de conscience*」である。「ある行為は、自動化されるにつれて、無意識的となる」。これは習慣の原則を示すものとも言えるが、「すべての教育は、意識的なものを、無意識的なものに移行させる術の中にあるはずだ」といった *Le Bon* の指摘は、重要である。知識や技術を本当に「身につける」ことを、教育の本質的過程として要求するとき、その意味するところは、これらの意識的獲得物の無意識化、いわば肉化であり、体得であ

るからである。

とはいえ、この無意識化が教育的価値をもつのは、この無意識化が、その「不可欠の条件として、自覚の段階、すなわち無意識的なものの、意識的なものへの移行という段階に先立たれて」^⑤いるからではなからうか。ここで無意識化というのは、より高度な段階における行動様式の安定を言うと思われるが、しかしその段階にまで達すること自体は、自覚の働きを不可欠の要件とするからである。^⑥

ところで、欲求が現われるのは、どんな時であらうか。直ちにみたされる欲求と、かなり長時間の探求活動を要する欲求とに分けてみよう。後の場合、すなわち「その本性から言って、直接みたされない危険がある欲求は、すべて前もって現われる」^⑦ことに、気付かないであらうか。空腹を覚えるのは、餓死の遙か以前という言い方は、おかしいだらうか。断食者は、三、四週間食べないでいられる。われわれは習慣から、十五日か二十日ほど早く食べすぎると言うこともできよう！しかしこの間の余裕が重要であって、原則としては、人間は生命の維持に必要な栄養物を、その間に探し出してくることができるわけである。実際の必要を見越して、欲求を予め起すことには、大きな機能的価値があるのであって、このことが、第四の法則、「先取

りの法則 [oi 'anticipation]」として、定式化されるのである。その「系」として、「精神生活の介入」があつて始めてみたされる欲求、「行為をその全体において動員する欲求は、前もって現われる」^⑧ことが、注意される。

実際、欲求の出現と、有機体のさし迫つた必要との間の、この空白がなかったら、精神活動は、その占めるべき位置がないので、不可能でもあれば、存在理由もないことであらう。学者の知的活動に、生活の必要とかわりなき完全な無私を保証するのは、この空白である。しかしまたそのために、学問の定義に関する高名な逆転も生じた。「認識が目的であり、行動は手段にすぎない」、と。しかし「生物学者」からみると、この主張は、先取りの法則によつて説明される「幻想」にすぎない。学者の活動は、人類に奉仕する高貴なものである反面、そのために消費される神経的エネルギーのことを考えると、自分の体のためには、何の役にも立たない。^⑨先取りは、有機体の必然性から思考装置を解放して、知的進歩の条件となる。しかし個人は、そのため、一方で利害から超越するが、他方で彼自身にとつては破壊的な形で、エネルギーを浪費するのである。しかしこの真理探究装置の存在は、環境への適応を常によりよく準備するという機能から、始めてよく理解され

るのである。ここに精神機能の両価性が、独自の心理学的説明を与えられるわけである。

ところで「子供と学者との間には、一つの大きな類似がある」と、クラパレードは指摘する。「子供の好奇心もまた、行動の直接的必要と関係なしに、一つの利害超越的な目的をもっているように見える」。子供の活動が、殊にその質問や遊びに見られるように、無償のものである所以である。しかしその理由を問うならば、その無償な行動や「好奇心が、成長の必要にに応じているからである」と、答えることになろう。大人からは無目的な気紛れと見える活動に対処するに当って、これはその基本的視点を与えるものであろう。

二

上述の如く、欲求は個人を動かす原動力であるけれども、その個人は、常に一つの目的、客観的目的をめざしているのであって、欲望がなくなることと求めているわけではない。腹のへった人は、食物が欲しいのであって、飢えを解消しようとしているのではない。美食家は、すてきな食事を望むので、食欲の消滅を願っているわけではない。

それどころか、食事が終って食欲がなくなったことを口惜

しがりさえする。^⑥

かくて欲求は、いわば外界に投出されて、そこで変形され、達すべき目的として、われわれの前にあらわれてくる。この目的を達しようとする働きが行為であり、この目的に対するわれわれの心理的かわりは、特に「興味'intérêt」とよばれる。従って「心理学的にいうと、行為は、欲求によってでなく、興味によって動かされる」というべきであって、そこから、「すべての行為は、一つの興味によって規定される」という第五の法則が引き出される。この興味に関する法則は、いわば「欲求の法則の、より一般的で、またより心理学的な面に外ならない」。^⑦

事物は、それに関係する主体の側に、様々な反応を起させる可能性をもっている。しかしそれらの反応のうちで、あるものは作用し、他のものは作用しない。ある反応を活性化するのは興味とよぶのであるが、この活性化の原因は、「単に欲求ではなく、また事物だけでもない。欲求との関係における事物である」。^⑧ 従って行為は、「二重の適応、すなわち内的環境(欲求)と、外的環境(もの)への適応」^⑨を、表現するのである。

行動すること、ある行為をなすことは、「瞬間毎に、可能な多くの反作用の中から選ぶことである。このたえざる

選択の動因が、興味である^⑤。興味とは、ある一定の瞬間に、「有力な行為を開始する原因、乃至は諸原因の配列」に与えられる名であつて、その限り「興味によつて規定されない行為を発見することは、絶対に不可能である」^⑥。

しかし興味はふつう、客観的には望ましくない主観的関心とみなされ、直接的には厭われる客観的理想をめざす努力と、対立させられる。しかし興味は本来は、欲求と事物との適合関係、目的としての事物への関心であり、努力はこの関心を持続させる行為といえるから、努力の出発点にはやはり興味がある。ただ努力を引き出すような興味は高度に意識的なものであつて、これに比べれば、そうでない興味は低くなるということはありうる。とすると対立は、興味と努力との間にあつたのではなく、高い乃至より客観的な興味と、低い乃至より直接的な興味との間にあつたことになる。だが後者が前者よりも、引力において強いという場合がしばしば見られ、対立をこの強弱の点から見ると、興味の高低は必ずしも興味の強弱と相関せず、却つて多く反比例する事実に出合う。

ということとは、幾つかの興味が同時に現われうるということであり、対立や葛藤はこれら興味同士の間にあるということである。人間は同時に、食べ、眠り、闘い、愛し、

学術研究をし、創作活動にたずさわることはできない。それぞれの特長における最もさし迫つた欲求、最も強い興味が勝つであろう。最も強いとは、主客が相関する事態に最もよく適応するという意味であつて、単純な強弱、高低の関係をこえるであろう。クラパレードはこの事実を定式化して、「一時的興味の法則 *loi de l'intérêt momentané*」とよぶ。すなわち、「どの瞬間にも、有機体は、その最大関心の線に沿つて、動く」^⑦、と。

この法則には、二つのあらわれ方がみられる。先ず、「突然生じた興味が、先行しているけれども未だみだされていない興味を、おしとどめる」場合。食物をあさりに来た動物が、突然檻の中にとじこめられていることに気づいた場合、逃げ出そうとする「自由の関心」が、栄養関心を抑止するようにみえる。いま一つは、「突然満足された関心が、その関心のために一時的におさえられて、下にかくれた他の関心を解き放つ」場合。しばられるのが大嫌いな犬が、しばられたため、目の前にもつて来られた大好物に何時間も見向きもしなかつたのに、一旦解き放たれるや、「二・三度とびはねて、自分の身が自由であることを確かめると、スूपのところへとんで返り、貪り食つた」^⑧、と。「ついでながら」、クラパレードは、殊更かような例をあ

げたかのように、警告を発していわく、「動物において非常に強いこの独立・自由の本能が、心理学者によってどんなに軽んぜられたか」と。自由への関心の、他にまさる根源的な強さに関するこのクラブレードの指摘は、興味の本质について、われわれの再検討を迫るように思われる。

三

ところである欲求を感じている有機体が、その欲求をみたすに適した反射的本能的行動方式を欠くとき、有機体はどうするか。今と同じような状況において、以前役に立った反応に訴えようとするのが見られよう。第七の「類似物再生産の法則 *loi de reproduction du semblable*」によれば、「すべて欲求は、以前好都合だった反作用（あるいは状況）を再び生み出し、似た事情において前に成功した行為をくりかえす傾向がある」という。不意をうたれたとき、われわれはこれまでの生き方を暴露するわけだが、しかし新しい状況に適應するのは、先ずもって、それに似た古い状況に照して判断することによってなのである。

この法則は、前に獲得した経験を新しい状況に利用するという、「記憶や習慣の機能的価値」を明らかにするであろう。そのおかげで、時・空・事物の違いが恰も存在しな

いかのように振舞って、われわれは絶え間のない緊張から解放されるのである。いわば「永遠不変の諸関係へのこの信仰がなかったら、われわれは不安・悲痛のたえざる感情」におしつぶされるだろう。新旧の差が大きすぎて、行為を、既知の標識で計ることができなくなると、途方にくれる外はない。記憶や習慣の、生活的でもあれば教育的でもある価値は、大きい。

しかしこの価値は、決定論の価値である。いつでも似たものを作り出そうとする傾向は、非常に強いので、その目的をこすと、一方で自由な活動を否定し、他方また上述した過度の一般化と、そのもたらす認識上の過誤を生むであろう。

しかし、記憶や習慣におけるような類似物再現が、不可能であるか、さもなければ無効力になるような全く新しい状況におかれると、「欲求は、一連の探求反応、試行・模索の諸反応を開始する」。これが第八に挙げられる「模索の法則 *loi du tâtonnement*」である。新しい状況におかれて困惑するとき動物も、「求め、試み、探す」。そして困難を打開する方法を偶然見つける。それは本能とも習慣とも異なる「第三の行動タイプ」、ジェニングズが試行錯誤と名づけたものであり、これをクラブレードは暗中模索と呼ぶ

のである。「われわれはこれを知能の芽とみなす。なぜなら探求なき知能はないからである。知能の真に特長的なプロセスは、探求のプロセスである」。

知能は、「本能や習慣のような適応手段が失敗するとき、働きに入る適応手段」であって、「一つの欲求に応える」。「知能を作動させる特別な欲求は、個人が環境事情に適応できないとき生ずる適応欲求、*besoin d'adaptation* である」。

ある瞬間における最大の興味に従って行動する個人が、思いがけぬ障害にぶつかったとき、この障害を克服しようとして、知能をゆすぶる特別の欲求が生ずるのである。この意味において、「知能は代理的機能 *une fonction vicariante*、すなわち代理的欲求に依存する機能である」。

知能の働きは、行動の挫折・停止という衝撃と共に、はじまる。この行動によって満足させられる筈の関心は、行動が続けられることを求める。この行動を続ける手段を発見することが、知性の行為なのである。人間は、根源的に行動へと傾向づけられた存在であり、この行動を調節し、欲求を満足させるという行動の目的を達するに最も役立つものとして、知的機能があらわれるのである。ここに、行動は、そのよりよき展開をはかるべき知的活動を含めて、全身的・全人的であることが求められる。この全身的活動

は子供にあっては遊びであり、知的活動を遊びと対立的にとらえないことが、機能主義的教育の視点となる。

同じように障害につき当たったとき、欲求そのものの満足を追う方向において、障害を克服しようとするのでなく、「反対の方向に向ってある利益をもたらすこと」によって、その不満の埋め合わせをすることを、「補償 compensation」とよぶ。このいわば「不均衡を防ぐために有機体が用いる術策」である補償については、ここでは遊びについてだけふれよう。遊びは確かにある場合全く補償的である。大人の遊びは特にそうであり、子供にあっては劣等感に悩んでいる時など、そうである。しかし子供の遊びをすべて、子供の実際に有用な活動の不十分さをつぐなう補償現象と見るのは、行きすぎであろう。確かに子供は、成長におされて、邪魔な現実をのりこえようとする欲求を示し、しかもこの欲求を、遊びにおいて架空の形で、安易に満足させているといえるかもしれない。しかしもしそうならば、遊びは、何よりも子供の発達の欲求を満足させるというべきであって、ただ単に子供の弱さをかくす策略にとどまるものではないであろう。

不均衡をかくす策略にすぎない代償と、欲求を実際に満足させて均衡を回復することを、区別することは時に困難

であろう。しかし遊びにおいて「代償的価値をもつのは、遊びそのものであるよりも、遊びの内容である。遊び自体は、子供の深い傾向を満足させるのである」。

この代償の法則に続いて最後にあげられるのが、「機能的自律の法則 loi de l'autonomie fonctionnelle」である。「動物的存在は、その発達の瞬間毎に、一個の機能的統一を構成する。すなわちその動物の反応能力は、その欲求にびったり合一しているのである」。子供であっても、それ自身として見られる限り、不完全な存在、未完成な大人ではなくて、自律性をもつ一個の全体であることが強調されるのである。

もう一度子供の遊びをとりあげて、この問題を考えてみよう。クラパレードに機能主義を鼓吹したものの一つに、カール・グロースの遊戯理論がある。遊びとは、グロースに従えば、偶然的な生理現象、つまりエネルギー過剰の結果ではない。遊びは機能的有用性を持ち、個人の発達において一つの役割を演ずる。子供が遊ぶのは、遊びが現在ただいま、子供の生存の欲求を満足させるからではない。子供はその未来のために遊ぶ。遊びが機能的であるのは、いま遊んでいる子供に關してではなく、明日の大人に対してである。遊びは予備訓練である。換言すればグロースにと

って、遊びとは、子供を、将来彼がなるであろうものに関連する縦断ロングテュータイム面において考察する場合にのみ、機能的なのである。

グロースの考え方に深く学ぶところのあったクラパレードは、この点でその師と分れる。彼はその精神発達理論において、遊びが機能的であるのは、子供の現在の諸欲求にかかわる横断トランスヴェルサル面においてである、と主張した。なぜなら遊びは、子供に一つの現実的で直接的な満足を得させるからであり、かつはまた、「遊びが未来を準備するのは、現在の欲求を堪能させることによってだからである」と。

機能的自律性の法則は、ここに一つの強力な確証を与えられる。「この法則は、教育実践にとって非常に重要か？——まさに」。もし子供が、《自律的》で完全な、自分の生命と自分自身の欲求をもつ存在であるならば、「教育は——子供の観点よりすれば——、生活への準備ではなくて、一つの生活である」と結論づけねばならぬであろうからである。

右のように人間行動の法則をおさえ、そこから教育にとって有益な幾多の示渉を与えられるのを感じるならば、それらが総合されて、一個の強力な教育理論にまで結晶しないとすれば、むしろ不思議であろう。機能主義心理学は、

機能主義教育論に結実する。

その原則にいう。「子供に学ばせたいと思うこと、実行させたいと思うことを、彼の注意や行動の自然な原動力に、結びつけ直そうと努めること、これである」と。子供は好奇心にみち、新しいものを知ろう・手に入れようという衝動に駆られている。この衝動に駆られた子供の自然な熱中の輪の中でこそ、われわれが子供に期待する活動はおのづからその花を開く。子供の自然な熱中とは何か？

——遊び、これこそ、子供の心身の健全な発達を促すために、自然が見つけた巧妙な手段である。

子供の自然な傾向を、われわれの味方にするか、敵に廻すか。ここに教育観の分岐点がある。伝統的教育に抗する新教育運動に媒介されたとき、クラパレードの心理学的研究は、教育理論の中に豊かな実りを見出すことになるのである。

この点、フェリエールの指導する「活動学校」運動にかかわった時、クラパレードの理論は、その鋭い効力を、実践の只中で検証されるのが見られるのであるが、その問題は別に稿をもうけて論じたい。

註

① 大谷大学哲学論集第二十号掲載の拙論「クラパレードの機

能主義的教育論について」参照。

② マックに関しては、L'Education fondée sur la psychologie; Edouard Claparède, L'Education fonctionnelle, pp. 10-14. ルソーに関しては、J. J. Rousseau et la conception fonctionnelle de l'enfance と題する注目すべき論文が、クラパレードの同上著作に含まれている (Claparède, op. cit., pp. 78-108) が、それは、別にルソーを論ずるに当たって、とりあげたい。

③ *ibid.*, p. 183 ④ *ibid.*, p. 143 ⑤ *ibid.*, p. 145

⑥ 同じ構想に基きながら一層大がかりな哲学的展開を行って、世界的な影響を与えたジュイムズやデュエイのアメリカ的機能主義から、クラパレードをへだてるものを、波多野完治氏はこの点に見ている。(「心理学と教育実践」六頁参照)

⑦ フランス心理学は、生命現象に対して機械論の立場をとる。これに対してジュネーヴ派心理学は、いわば生氣論の立場をつぐ形で、機能主義を骨格とする。この相違は、おそらく、デカルトの伝統を直接相続するフランスと、カルヴィニズムに基づくフランス語圏スイスとの、ちがいであろう。しかし、フランス語で考えることの主知主義的性格は、否めないようである。アメリカ機能主義が行動主義的方向をとる一種の民族文化的必然性と対照するとき、このことは鮮やかに見てとれるのではなからうか。ブルーナーを媒介とするピアジェの影響が、デュエイ学派が支配した時代の次の時代を指導することになったところに、アメリカとジュネーヴの機能主義のちがいが象徴されているように思われる。(この点については哲学論集第二十号掲載の小論を参照されたい)。

⑧ Claparède, op. cit., p. 148.

- ⑨ ⑩の後半を参照。
- ⑩ 大谷大学哲学論集第二十号掲載拙論の五を参照。
- ⑪ Claparède, op. cit., p. 56. ⑫ *ibid.*, p. 57.
- ⑬ cf. Piaget, *La psychologie d'Edouard Claparède*; Claparède, *Psychologie de l'enfant et pédagogie expérimentale II, Les methodes*, p. 16.
- ⑭ *idem.*
- ⑮ Claparède, op. cit., p. 58.
- ⑯ cf. Piaget, *Le jugement et le raisonnement chez l'enfant*, p. 78 sqq.
- ⑰ Piaget, *La psychologie d'Edouard Claparède*, p. 15.
- ⑱ Claparède, op. cit., p. 59.
- ⑲ 例えは子供は、自分が犯していた間違いを、その間違いそのものによって気付き、「失才自発的注意行為によって、意識的にあやまりをさげ、ついでこの誤りを再び犯さなごよむな習慣をつける」のである。(idem)
- 補説すれば、伝統的教育が忘れがちであったのは、この点であろう。既成の知識や技術という、他人の自覚の産物にすぎないものの、記憶や習得を迫られても、自分自身の無自覚的活動の自覚の結果でない以上、苦行の強制以外の何物でもない。つらい反復練習に耐えられるのは、何らかの形でその意味を知っていると、何らかの自覚に先立たれるときに限られるからである。
- ところで子供の思考過程そのものの考察として、これらの法則は重要な意味があり、同化と調節を中心概念とするピアジェの研究へとうけつがれて行くことになるのである。
- ⑳ *ibid.*, p. 60. ㉑ *ibid.*, p. 61.
- ㉒ 知的進歩が肉体的衰弱につながるのと、しばしば反文化主義に陥る主張は、確かに、先取り現象によって支持される。しかし同時に宗教的自己犠牲の崇高さも、その心理的因由をどうにもしてある。
- ㉓ *ibid.*, p. 62.
- ㉔ 食欲の再生を求めて、折角たべた上等の料理をわざと吐いたという、古代のローマ人や中国人の奇妙な知恵の理由が、ここに見える。
- ㉕ *ibid.*, p. 63. ㉖ *ibid.*, p. 64. ㉗ *ibid.*, p. 65.
- ㉘ *ibid.*, p. 66. ㉙ *ibid.*, p. 68. ㉚ *ibid.*, p. 71.
- ㉛ *ibid.*, p. 74.
- ㉜ Jennings, *Behaviour of the Lower Organisms*, 1906.
- ㉝ Claparède, op. cit., p. 114.
- ㉞ *ibid.*, p. 112. ㉟ *ibid.*, p. 113. ㊱ *ibid.*, p. 118.
- ㊲ *ibid.*, p. 160. ㊳ *ibid.*, p. 75. ㊴ *ibid.*, p. 76. ㊵ *idem.*
- ㊶ この主張は、特にルソーと共に古く、クラバレードのルン一論¹⁾のこの点に集中されている。
- ㊷ *ibid.*, p. 30; cf. Claparède, *Autobiographie, Psychologie et pédagogie expérimentale*, p. 34 et p. 118 sqq.; Karl Groos, *Spiel der Tiere*, 1896.
- ㊸ Claparède, *Le développement mental, Psychologie de l'enfant et pédagogie expérimentale*, p. 137.
- ㊹ Claparède, *Éducation fonctionnelle*, p. 77.
- ㊺ *ibid.*, p. 148.